

沖縄地理学会会報 ● 第 70 号

2019 年 6 月 10 日発行



編集・発行 沖縄地理学会 © 発行人 小川 護
 OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
 事務局 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
 琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付
 電話 098-895-8191 eメール info@okinawachiri.sakura.ne.jp
 ホームページ <http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp/index.html>
 振込口座 02040-4-4697 (加入者名：沖縄地理学会)

2019 年度 沖縄地理学会大会で「石灰岩地域シンポ」 7 月 27 日（土）沖縄大学で開催

2019 年度沖縄地理学会大会・総会を、2019 年 7 月 27 日（土）、沖縄大学で開催します。大会では、一般研究発表（口頭発表／ポスター発表）のほか、シンポジウム「先島諸島における石灰岩地域の人と自然」を開催します。一般研究発表を希望される方は、下記に従ってお申し込みくださいますようご案内いたします。

記

- 開催日時：2019 年 7 月 27 日（土）
10：00（開始予定）～17：00
- 会場：沖縄大学 3 号館 1 階 101 教室
- 一般研究発表（口頭発表／ポスター発表）
の申し込み方法、締切：

(1) 発表者名、(2) 発表タイトル、(3) 口頭発表／ポスター発表のいずれかを明記してください。発表要旨は発表申し込み時には必要ありません。（発表内容の要旨を「会報」69 号に掲載しますので、大会終了後にそのご執筆についてご依頼いたします。）口頭発表（質疑を含む）は 15～20 分程度を予定しています。発表希望者は、7 月 9 日（火）までに、つぎの学会事務局に申し込んでください。

- 学会事務局：〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地 琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付（電話：098-895-8191／eメール：info@okinawachiri.sakura.ne.jp）

● 第 4 回 沖縄地理学会石灰岩地域シンポジウムにむけて

沖縄地理学会での石灰岩地域シンポジウムは今回で 4 回目となっている。2011 年第 1 回では「石灰岩地域を知る最初の一步」と題して、上原富二男氏による基調講演「石灰岩地域の自然と人」の後、石灰岩地域の土壌特性やジオツアー、世界遺産などを通じて、石灰岩地域の強みと弱みを議論した（会報第 55 号参照）。2013 年第 2 回では「本部半島－石灰岩地域の魅力をさぐる」と題して、尾方隆幸氏による基調講演「地球史における石灰岩の役割」の後、自然的・人文的な石灰岩の魅力を議論した（会報第 59 号参照）。2016 年第 3 回では「沖縄島中部石灰岩地域の地理的価値を考える」と題して、府本禮司氏による基調講演「現在に至る土地利用の変遷に関する一考察－土地利用計画等の作成の現場から－」の後、沖縄島中南部における石灰岩地域の地形や水環境、植生などに関する特性や土地利用との関係性が議論された（会報第 65 号参照）。以上のよう、石灰岩地域の地理学的特性を沖縄島の北部や中南部を事例に議論してきた。

今回の第 4 回シンポジウムでは先島諸島を取り上げる。先島諸島には、宮古島の地下ダムや東平安名岬、陥没ドリーネ、低島である竹富島の集落景観などがあり、観光的にも魅力的な石灰岩地域を形成している。今回は基調講演で名城 敏氏、パネリストに羽田 麻美氏、田代 豊氏、崎浜 靖氏とともに、先島諸島の石灰岩地域について議論していく。（文責：上江洲 薫）

● 2018 年度例会報告

● 沖縄地理学会巡検報告：「真志喜の名所・旧跡を歩こう」

2018 年 11 月 10 日（土）午前 9 時～12 時、宜野湾市教育委員会文化課主催の第 18 回『イグルー・シマ文化財教室』の一環で、真志喜区の巡検が実施された（共催：沖縄地理学会）。テーマは「真志喜の名所・旧跡を歩こう」であり、案内者は崎浜 靖会員であった。参加者は 30 人余。

真志喜の集落景観と歴史文化遺産を中心に巡検し、市役所職員が羽衣伝説や察度由来の地を説明した。
（文責：崎浜 靖）

一枚の図で語る地理トピック # 15

石と土をして語らしめよ

渡久地 健（ゆんぬピシバナ研究チーム）

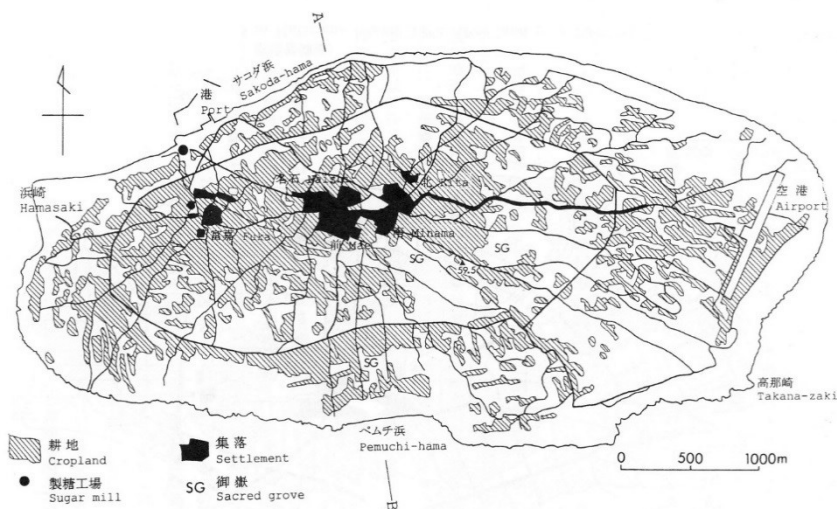
この 3 月に定年退職して、本部半島北東部の海拔十数メートルの琉球石灰岩台地で新しい生活を始めた。那覇のアパートから持ってきた熱帯果樹ジャボチカバを移植するために、庭の片隅に鍬で穴を掘ると、白い小石が数個出てきた。ミミズも一緒に現れた。一瞬にして炎天下に曝された、目がなく手足もない環形動物は必死にもがくので、すぐに土の中に戻してやったが、その刹那、私は「ああミミズになってみたい」と思ったものだ。土の中で、ミミズは石灰岩の小石をどのように知覚しているのだろうか。ミミズの環世界（Umwelt）が知りたい、と思ったのだ。

さて、図は、圃場整備前の波照間島の耕地分布図である。1979 年に始まり 2000 年に完了した農業基盤整備事業によって、耕地はほとんど方形になったが、整備前は不定形であった。耕地の形状と分布は、おそらく隆起サンゴ礁の微地形を反映していると思われる。環状道路の内側が最も高い段丘 I 面、（海拔約 40～55 m）である。I 面と II 面（約 20～30 m）の間には比高 7～

8 m の明瞭な段丘崖があり、環状道路はその崖の下部を通っている。島の南側では、道路沿いに帯状の耕地が広がっているが、ここは浅礁湖（shallow lagoon）の跡であろう。また、筋状の耕地分布（特に空港の西側で顕著）は、縁溝—縁脚系（groove-spur system）を映しだしているに相違ない。

ドイツの地理学者ラッツェルは、その著『ドイツ』（1897）の中で「凡ゆる山、凡ゆる岩が我々に話しかけ、過ぎ去った時代を物語る」（5 頁）と記したが、圃場整備後の波照間島の景観は、もはや過去を多く語れなくなっている。

ある聞き書き（盛口 2010）によれば、かつて波照間島には畑を分類する言葉が 7 つもあっ



波照間島の耕地分布図(1978 年、圃場整備前)。島袋・渡久地 2001 より転載。

たという。波照間では畑をピテーというが、小高い所にあり土壌が浅い畑をウガリピテー、くぼんだ所にあり土壌が深く石ころの少ない畑をトゥーピテーといい、ウガリピテーが藪になるとキヤマピテー、トゥーピテーがカヤ原になるとアラスピテーと呼んだ。海岸端の潮のかかる畑はシバピテー、海の砂利の混じった畑はナリサピテー、それらより内側の、砂と粘土が混じった水はけがよく固くない土壌の畑はメーラピテーと呼び分けられたという。

私の住む石灰岩台地は、いまの私にとって非常に単調な景観だ。たとえ地形学の眼を凝らしてみても、灌木に覆われた岩や、ハマイヌビワなどの生い茂る小山があることに気づく程度に過ぎない。いわんや、土壌の違いなど分りようがない。だからこそ、私は、自然地理学から多大な影響を受け風景描写の文学といわれるオーストリアの作家シュティフターが、小説『晩夏』で登場人物に語らせた次の言葉には励

まされるのだ。「ある地域にだけ特有の前兆があって、それは代々伝えられてきた土地の人にしかわからないものなのです。このような経験は科学的にその根拠が明らかにされることがよくあるのです」(上巻, 129 頁)。

これから石灰岩の上で暮らし、少しでも多くその自然を読み、感じることができるようになりたい、と希う。

文献：

島袋伸三・渡久地健 2001：サンゴ島におけるサトウキビ農業の変化——圃場整備後の波照間島の事例。

琉球大学法文学部紀要人間科学, 第 8 号, 151-192.
シュティフター 1857／藤村宏訳 2004：『晩夏』(ちくま文庫), 筑摩書房。

盛口満 2010：波照間島・天水田と畑。安溪遊地・盛口満編『田んぼの恵み——八重山のくらし』ボーダーインク, 43-72。

ラッツェル 1898／向坂逸郎訳 1941：『ドイツ——その自然と文化』中央公論社。



現地でひらめいた研究テーマ

崎浜 靖 (沖縄国際大学)

「フィールド調査」というと、しっかりとした研究目的や調査計画、そして方法論を持って現地に赴くといった印象がある。実際に、大学での卒業論文や修士論文などの作成においては、そのようなフィールド調査がなされることが一般的であろう。

しかし、「調査」といった意識はもたずに、何気ないシマ歩きから、研究テーマを見つけることも多い。現在、私が進めているマラリアに関する歴史地理学的研究は、シマ歩きの現場からひらめいた研究テーマである。

私は 1996 年に、翔南高校 (現・宮古総合実業高校) に赴任した。前任校の首里東高校では、社会科専用の視聴覚教室もあった関係で、「地理 B」の授業では、シマ歩きで撮影したスライド写真を見せながら、「沖縄の地理」に関する授業を行っていた。

翔南高校への異動後も、週末は陸上部顧問として活動しながら、島内を車で回り、地理写真を撮影していた。そして、6 月中旬に、ある「風景」に出くわしたのである (写真参照)。この写真の「水溜り」は、5 月下旬に 212.5 mm の記録的な降雨の 2 週間後に撮影したものである。



大雨後の冠水地(1996 年 6 月)

写真にある水溜りが、琉球石灰岩が広く分布する宮古島において、「ある場所」に多く分布していたことが私には驚きであった。当時の私の浅い知識からは、宮古島はすべて石灰岩で覆われているため、降った雨水はすぐに地下に浸透し、このような水溜まりが形成されることはないという「思い込み」があった。

その誤解を解いてくれたのは、沖縄地理学会会員で、当時、宮古農林土木事務所に勤務していた中村倫子さんであった。中村さんは豪雨後の水溜りの地図（農地冠水地図）を作成しており、写真にある水溜りの広がる場所の表層地質は、泥岩・砂岩など非石灰岩が分布するためであると指摘された。

その後、「水溜まり」のことは頭の隅に置いて、沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員として旧平良市東仲宗根添を対象とした明治期作成の地籍調査を依頼された時に、1960年代の仲松弥秀先生のマラリアに関する論考が目にとまった。仲松先生が作成したマラリア有病地の分布図の中に、とくにマラリアが濃厚な地帯とされた場所が、先述した水溜りの分布とほぼ一致することがわかったのである。直観的に蚊（ハマダラカ）のボウフラの発生しやすい「湿った土地」で、マラリア禍が起こるのではないかと連想し、現在、近代統計資料を加えて、八重山諸島と比較研究を継続している。

お知らせ

沖縄地理学会例会:

テーマ:「沖縄島中南部 1948 年地形復元—失われた亜熱帯地形をバーチャル空間に—」

講師:渡邊 康志 会員

日程:2019 年 6 月 27 日(木)16:20~17:50

場所:沖縄国際大学 13 号館 1 階会議室

※沖縄国際大学沖縄経済環境研究所第 1 回研究会との合同開催

●会員の受賞●

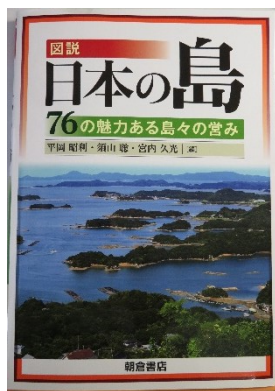
- 石川 友紀さんが「第 40 回沖縄文化協会賞」特別賞を受賞し、2018 年 11 月 17 日に沖縄国際大学厚生会館で授賞式と受賞祝賀会が行われました。

●会員が関わった刊行物●

● 平岡昭利・須山聡・宮内久光 編『図説日本の島 —76 の魅力ある島々の営み—』朝倉書店、B5 判、180 頁、2018 年 10 月 25 日発行、本体 4,500 円＋税。助重 雄久さんが周防大島・対馬を、堂前 亮平さんがトカラ列島口之島・徳之島を、堀本 雅章さんが伊平屋島・鳩間島を、宮内 久光さんが与勝諸島・座間味島・久米島・石垣島・竹富島を、崎浜 靖さんが渡名喜島・波照間島を担当して執筆しています。

● 月刊「地理」2019 年(64 巻)2月号「サンゴ礁保全の現在とこれから サンゴ礁漁場の多様性とその価値—奄美沖縄の漁師に学ぶ」渡久地 健、A5、24-31 頁、1204 円＋税。

● 沖縄国際大学公開講座委員会編『沖縄国際大学公開



講座 28 変わる沖縄 ～地域環境政策学の視点から～』編集工房東洋企画、384 頁、2019 年 3 月 29 日発行、1500 円＋税。上江洲 薫さんが「観光地の活性化と観光関連税」を、小川 護さんが「沖縄農業におけるマンゴー産地の地域特性とその認知度」を担当して執筆しています。

● 長嶋俊介編『日本ネシア論』藤原書店、A5 判、478 頁。2019 年 6 月 10 日発行、4200 円＋税。ISBN978-4-86578-223-3。この中で、会員の渡久地 健さんが「日本における珊瑚ネシア群——日本一の石西礁湖からの発信」(66-69 頁)を執筆しています。

●会員消息●

● 堂前 亮平さん(名誉教授)が 2019 年 3 月に久留米大学を特任教員の終了に伴い退職されました。

● 渡久地 健さんが 2019 年 3 月に琉球大学を定年退職されました。

● 町田 宗博さんが 2019 年 3 月に琉球大学を定年退職し、その後、名誉教授となりました。

活動日誌 (2019 年 11 月～2019 年 5 月)

▼2018/12/10(月) 2018 年度第 2 回幹事会(ばいかじ雄国大前店、18:30~19:30)議題:①会務の報告、②その他

▼2019/02/18(月) 2018 年度第 3 回幹事会(沖縄国際大学 13 号館 1 階会議室、19:00~20:20)議題:①会務の報告、②『沖縄地理』のコスト削減案について、③その他

▼2019/04/8(月) 2018 年度第 4 回幹事会(沖縄国際大学 13 号館 1 階会議室、18:30~19:15)議題:①会務の報告、②2018 年度総会・大会の準備、③『沖縄地理』の電子化について、④その他

▼2019/05/14(月) 2018 年度第 5 回幹事会(琉球大学文系総合棟 602-2、18:30~19:30)議題:①会務の報告、②2018 年度総会・大会の準備、③その他